

# 調和のための必要

伽藍堂

そいつが来たのは昼休み、会社近くのうまいうどん屋へ向かう道すがらのことであつた。

「ちよつと失礼しますが、笹村貴之さんですね」

そう言ったのはおれとさほど年の変わらぬように見える若い男だつた。おれはこいつに見覚えが無かつたし、おれはヘッドハントされるような優秀な人材ではない。こいつはセールスか何かそういった類の輩であろう。そう思った俺はあまりまともに扱うつもりも無く答えた。

「そうだけれど。誰ですか、あなた。まずは名乗るべきじゃないか」

そう言ったけれど相手は特に調子を変えずに続けた。

「いえ、一応形式的に確認しただけで特に意味はありません。あなたが笹村貴之さんだということは分かっていますので。早速ですけど、あなたに関して比較的重要な変更がありますので報告に来ました。ええとですね、調査の結果あなたの配置は非常に、ええと何と言いますか、正と負、陽と陰、プラスとマイナス、どう表現しても別に構わないんですけど、あなたがこの配置のままだと世界的なバランスでどうしてもマイナスが大きくなつてしまふと、そういったわけなんです」

ああそうか、そっちの方か。納得できたおれはさつきとうどんを食って会社へ戻ることにした。

「ああ、そういったのなら今は間に合ってるよ。他を当たってくれ」

足早に去ろうとするおれの後ろからまたうるさく聞こえてくる。

「ああつ。いいんですか聞かなくても。伝えないと怒られるので手短に言いますよ。あなたの配置が間違ってたみたいなので明日に日付が変わったら配置転換を行いますからね。伝えましたよ。聞いてなかったとか言わないでくださいよ」

だんだん小さくなる声を後にうどん屋に入り、うどんを食った。帰り道にはあいつは居なかつたのでほつとしながら会社に戻った。

仕事を終えて電車で家に戻る。毎日のことだけれども終電に揺られながらの帰宅である。家に着く頃にはもう十二時を回っていた。鍵を開けて家に入る。居間の電気が点いているので親父か母さんか、あるいは二人ともまだ起きているのだろう。そんなことを考えながら居間の戸を開けて中に入る。

「ただいま」

中には親父と母さん、二人とも起きてテレビを見ていた。二人はおれのほうを見たが、なにやら様子がおかしい。二人とも、特に母さんの表情がこわばっている。親父が口を開いた。

「だっ、誰だ。こんな夜中に。け、警察を呼ぶぞ。出て行け」

驚いて二人の顔を見たけれどやはりおれの親父と母さんの顔である。この部屋も二十数年見慣れたいつもの居間だ。

「おいおい、ちよつと遅かったからつてその言い方は無いだろう。大体いつもこの位の時間に帰ってきてるじゃないか。疲れてるんだからふざけないでくれよ」  
そういつたけれども親父は母さんを庇かばうようにして、母さんとおれとの間に立ちふさがった。

「ふざけているのは貴様のほうだ。酔っ払いか。それとも強盗か。さ、さつさと出て行け。うちには何も無いぞ。さあ、さあ出て行け。ぶちのめされたいのか」  
そういつて親父は近くにあつたガラスの灰皿を掴むと今にも振り下ろさんばかりに構え、おれを鬼の形相で

睨む。

「な、何だよ。おれだよ。親父の息子の貴之だよ。お、おれもそろそろ怒るぜ。何がしたいんだよ。ボケちまったのかよ」

すると親父は顔を赤くして殴りかかってきた。

「なんだと貴様。勝手にうちの家に入ってきたやがって。あろうことか息子だと。おれの家には息子などおらんわ。このつ。このつ。出て行けっ」

どうやら親父は本気で殴りかかってきたようだ。おれが躲かすと親父の振り下ろした灰皿が壁をぶち抜いた。

もう一発振り下ろしてきたのもう一度躲すと親父はバランスを崩して床に崩れる。部屋を散らかすとすぐに怒っていた母さんは、壁に穴があいたことなど全く気にならぬ様子でおれに対して怯え、震えている。それを見ておれは、家を飛び出した。

何が起こったのか解らず、おれはただひたすらに走った。走って走って、走った。そして走って走ると、思い切り転んで膝を擦り剥いた。痛いやら訳が解らぬやらでおれは泣いた。泣いて泣いて、鼻水を垂らしていると、一人の男が話しかけてきた。見ると昼間の男

である。

「だから言わんこつちやない。全く。だからあれほど話を聞けとிட்டたでしょうに。怒られるのは僕なんですよ」

何だこいつは。一体全体何を言っているんだ。そうだ、親父と母さんは昨日までは普通だった。今日の昼間こいつが変な勧誘してきて帰ったらおかしくなってたんだ。

「やい、この野郎。おれの親父と母さんに何しやがった。帰ったらおれのこと忘れていておれに殴ってきてやい、貴様、親父と母さんに何かしただろう。解つてんだ。お前だろう」

それに対する奴の答えはおれをさらに混乱させるものだった。

「いや、正確に言えば僕がしたんじゃないですよ。確かにあなたからすればお前達ということだけでひとくくりになるんでしょうけどそつちは僕の管轄じゃないので僕には分かりかねます。聞くなら僕じゃなくて管理課の方へ聞いてください。僕は単にあなたに伝達事項を伝えるために来ただけです。僕に当たってもお門違いですよ」

おれには奴が何を言っているのか解らなかった。でもなんだか腹が立ったので奴を殴ることに決めた。

「うるせえ、食らえ」

おれは確かに奴の腹に重い一発を食らわしてやったはずだ。そう、確かに食らわしてやったはずなのだ。だがおれの腕には全く手ごたえはなく、そしておれの腕は奴の胴に食い込んでいた。

「ぎゃつ。な、何だ。幽霊か。化け物か。そうか、これは夢か。ゆ、夢に違いない」

そういつて眠ろうとしたおれに奴はまた話しかけてくる。「何だか解ってもらえないようですけれども、僕は関係ありませんってば。それに僕を殴っても意味ありませんよ。僕はあなた方よりも上位の、あなた方の言葉で言ってみるならば精神存在、精神生命体とでも言いましょうか。今のこの姿もあなた方にコンタクトをとるための仮の姿ですので実体はありませんよ。ええとですね、昼間にあなたが聞かなかった細かいことを伝えますよ。あなたの今の配置は我々の調査によると非常に世界に悪影響を及ぼしている。これは完全に我々のミスです」

奴の話に少し興味が出てきたおれは言った。

「おれは幸せに暮らしているぞ。何も大きな悪いこと何か起こってねえよ」

それに対して奴はまた続ける。

「いえ、あなた自身ではなく、世界に悪影響を及ぼすといっているんですよ。あなたが今のままで居ることにより世界的な災害、世界的な経済不況、世界的な食糧不足など様々なマイナスの要素が何かしら増えることとなります。ですがあなたの状況を少しずつ調整してはさらに大きな厄災を招くことになる。それを防ぐために今回の措置が取られたということです。具体的に申し上げますと、今丁度近くに居るので説明しやさいんですけれども、あなたは今までの笹村貴之からあの建物の住人となります」

そう言つて奴が指差した先は築何十年経っているか判らないようなぼろいアパートであった。

「おい、ふざけるな。おれは元の家で暮らすんだ。やい、おれを親父と母さんの居る家に戻しやがれ。てめえがやつたんだらうが」

奴は困つたような顔をして答えた。



「だからですね、何度も言いますが僕は関係ありません。そしてあなたが昨日まで住んでいた家はもうあなたの家じゃありません。さらに言うなら昨日まであなたの家族だった人たちはもうあなたの家族じゃありません。赤の他人です。もうさつき体験してきたでしょう。分かったらさつきとあの建物の一〇二号室に住んでください。鍵はポストに入っているはずです。それと今日からのあなたは橋上吉雄です。コンビニのバイトで生計を立てているので明日からちゃんと出勤してくださいね。コンビニは駅前のコンビニです。ので。分からないことがあれば今度来た時お願いします。近いうちにまた伺いますので。それでは今日はこの辺で」

そう言うとなんはおれの前から姿を消した。比喻じゃない、奴はおれの前から、消えた。

訳の解らぬ頭のまま指示されたままにアパートの一〇二号に鍵を使って入り、きつとこれは夢だと思いがら布団にもぐりこんだ。ああおれは朝になればあの二十数年暮らしているあのいつもの家のいつもの布団で目が覚めて母さんの作ったみそ汁を飲んだら満員電

車に揺られて会社へ向かうんだ、そう思ったのだけれど聞き慣れぬ携帯電話の音にたたき起こされた部屋は見慣れぬ六畳間だった。眠い頭で携帯電話の画面を見ると「コンビニ」と表示されている。慌てて通話ボタンを押して耳に当てると、頭に怒号が叩きつけられた。「おいこら、今何時だと思ってるんだ。お前が居ないせいでどれだけ大変だったと思ってるやがる。こっちはお前みたいなものでも数に数えているんだぞ。それが一人減るだけでこっちにどれだけ迷惑がかかっているかお前は考えたことがあるのか。お前の顔を見るのは癩だ。が今からでもいい。さっさと顔を洗ってこっちへすぐに来い。解ったな。こんなことは二度と許さんからな。何をぼさつとしているんだ。早くこっちへ来いと言ってるんだ。いつまでぼおつとしてるんだ。早く来い」そこまで一気に言い終わると電話は切れた。おれはしばらくぼうとした後にやっと事態を飲み込んだ。どうやらおれはもう橋上吉雄であり、一〇二号室の住人であり、そして駅前のコンビニの朝早くから出勤する店員であるということのようだ。初めは実感がなかったのだけれどもだんだんと罪悪感と焦燥感が心中を占め

てゆく。でもまあコンビニのバイト位別にクビにされてもいいだろう、もう一度寝て考えようとしておれは気付く。そうだ、おれには帰る家などないのだ。このおれ橋上吉雄はここ七、八年は実家に帰っていない。それだけではなく、家族の誰とも全く連絡を取っていない。家族がおれに連絡をしてくるはずもないしおれの方から連絡するつもりも毛頭無い。つまりおれはバイトが無くなり貯金が尽きれば後はどうしようもないのだ。そうでなければあんな奴のコンビニなどで働き続けているわけは無い。おれは慌てて服を着替えながら、今回の遅刻で鬼の首を取ったようにおれを罵り続けるであろう店長のことを考えると頭も体もひどく重く感じた。

バイト先に着くと、人手が足りないと言っていたはずの店長はおれを三十分間も説教し続けた。やっと開放されたおれを待っていたのはペットボトルや缶の飲料を後ろから補充する仕事である。今やもう他人の人生を見るようにしか思い出せぬ村貴之であったおれは本来ならばこの時間は会社に向かつての通勤途中である。ああ他人の人生を羨んでも仕様が無いけれど、お

れはこのまま一生缶コーヒーとコーラを補充しながら死んでゆくのだ。ああそうなのだ、そうなのだ。今まで生きてきてあまりそんなことを考えたことは無かつたけれども、笹村貴之の人生を眺めてみればおれの人生のなんと貧相で薄ら寒いことか。ああそれでもおれにはどうしようもないのだ。そしておれにはあの憎い店長を殴りつける度胸も根性も持ち合わせてはいないのだ。そんな気分を満たされながらコンビニでの本日の勤務を終える。ニタニタ笑いながらおれをなじり続ける店長を気にしないようにしながらアパートの一〇二号室へと帰りつく。まだ夕方にもなっていないかったのだけれども、おれは布団に崩れ落ち、眠りに落ちた。そうしてからしばらくの間は、あの野郎また来ると言いながら全く来る気配を見せねえなんて今度来た時にはどうしてくれようか、などと考えていたのだが、一ヶ月も仕事と布団を往復しているとそんな気も薄れてきた。丁度そんな時期を狙っていたのかは定かではないけれども、ちょうど一ヶ月を少し過ぎた頃にまたあいつがやってきた。

「やあやあ、遅くなつてすみません。色々とありまして」

全く悪びれる風も無くうちに上がりこんできた。

「ああ、あんたか。おれは毎日バイトに行ってるし、食うことも別に困るわけじゃない。別にもうアンタに来てもらおう必要も無いよ。どうせあんたに来てもらったところで何か状況が変わるわけじゃなさそうだしな」

日々の生活に疲れていたということともうこれ以上こいつにおれを引つ掻き回されたくないということもあり、おれはこいつとまともに話をする気は起こらなかった。だがその後にそいつの口から出された言葉を聞く限り、またおれはこいつに面倒な目に合わされるのではないかと思われた。

「ええとですね、遅くなったことにも訳があるんですよ。別に遅くなったことの言い訳をするわけじゃないですけどね。我々は前回の配置転換の処置の後、色々と全体の経過を調査していました。本当ならば世界のマイナスが減ることで全体としては良い方向に動くはずだったんですけれども、残念ながら調査の結果は芳しいものではありませんでした。原因を突き止めるために我々が調査、研究を進めたところ、前回の配置転換の計画に一部ミスが存在することがわかりました」

奴は自分達に落ち度があることでも事務的に伝えてきた。「何だよ、それ。じゃあ何か。おれがこんな惨めな生活を送っているのはためえのせいだつたつてことか。やっぱりてめえのせいじゃねえか。この野郎どうしてくれる」

小さくなっていた怒りの感情が目の前の相手に対して膨らんでいく。おれが奴に殴りかかろうとすると、奴は早口でまくし立てた。

「待つてくさいよ。だから僕のせいじゃありません。んつてば。何度言ったら解るんですか。後、あなたが僕を殴ろうとしても意味が無いってこともこの間体験したでしょう。全く。早とちりしないでください。ミスつて言ってもあなたを配置転換することには全く変わりはないんですから。ただその配置先が少し変更になるだけです」

奴は心底おれのことを面倒だと思つているような態度である。おれはさらにフラストレーションが溜まったけれども、こいつを殴ろうとしてもさらにフラストレーションを溜めるだけだということをやつと思ひ出せたのでこらえてこいつの話を聞くことにした。

「するならさつきとしやがれ。煮るなり焼くなりなますにするなりあぶるなり好きにしやがれ。さあ、今度はおれはどうなるんだ。ルンペンにでもするつもりかい。いいさ、地見屋でも屑屋でも何でもやってやらあな」  
相変わらず特に調子を崩さずに奴は続きを話し出した。  
「どうやら本来の配置場所が少々特殊だったために管理課が試算をミスしてしまったようです。あなたの本来の配置場所は神です」  
これを聞いておれは耳を疑った。

「かみ？ かみというところあのゴツドの神か」  
やはり表情を変えずに奴は言った。

「はい、その通りです。今の神はまた別の場所に配置転換となりますので、そのポストにあなたが配置されるということです。それ以外は前回の配置転換とあまり変わるところはありません。何か質問はありますか」

これには流石のおれも肝を冷やしてしまった。神だとおれが。そんなことがあつてたまるか。しかしこいつがそうだと言うのであればそうなのであろうか。神。神である。この惨めなおれが、である。神とはこの世界をつくり、全知全能であり、全てを知るものであり、

全てを司るものである。眉目秀麗、風光明媚、家族円満、安産祈願である。このおれにそんなものが務まるわけが無いのだ。

「お、おれがそんなことに。神なんぞになるだと。ふざける。てめえ、いい加減なことばかり抜かすんじゃないえ。おれが、お、おれが神。神だと。ば、ば、馬鹿も休み休み言えってんだ」

奴は本当に面倒そうに答えた。

「けれどもそう決まったのですからおとなしく従ってください。明日からあなたは神となりますので、ええと、もう数分しないうちに橋上吉雄ではなくなります。何しろことを急ぐ必要がありますので連絡が遅くなつたことはご勘弁ください」

話し終わると奴は消えた。何故こういつもいつも責任感の無い奴なんだ。ああ、そしておれが橋上吉雄であることはもうすぐにも終わりとなるのだ。そうしているとおれは今まで感じたことの無い感覚を感じた。強いて例えるならば身体から脳味噌と内臓だけでにゆるりと外に這い出るような感覚とでもいおうか、とにかく引っ張り上げられるような、身体を下に引っ張られ



るような、奇妙な感覚を味わったと思うと、おれは地球の全てを見ていた。目で直接見ている感覚とは違う。まさに神の目とはこういういったものなのだろうかといえないような感覚を味わう。そうしてしばらく驚いた後、おれは気付いたのだ。おれは神である。神は全知全能である。おれはなんだって出来るのだ。それに気付きおれはあの憎々しい店長を殺そうとした。しかしどこからというでもなく声が響く。

「それはあなたの仕事ではありません。あなたの仕事はその目で世界を仔細まで見て、少しずつ少しずつ良い方向、プラスの多い状態に持つていくことです。男女の結婚、昇進、会社の運営、色々ありますので全てを、本当に少しずつ調整するようお願いします。なあに、大丈夫ですよ。世界での一秒はあなたにとっては一日あることと等しいですから。時間は十分にありません。それでは」

おれは大きな勘違いをしていたようだ。神とおれや世界の奴等が考えていたような好き放題できるすげえ奴じゃない。奴等のお気に召すように世界を調整する管理人のことらしい。そうしてより良い状態に持つていくの

だろうけれど、おれはこの仕事には終わりが無いのだろうと感じ始めていた。けれども今のおれは、今見えてくるこの世界を取り上げられることをどうしても許すことが出来ない。おれがこの世界を自分の手に置いておく方法は一つしかない。本当にいつ終わるとも知れぬ、いや終わることの無いこの仕事を続けてゆく他は無いのだ。こいつらは毎日毎日飽きもせず同じことを繰り返す。この下らぬ生き物達を見て、私が正しく動かし、私が導き考えさせるのだ。九人目の人間の入る会社を決めたとき、ふと、世界が、人間というものがいまいちうまくいかない、その理由に行き当たった気がした。けれども私は下らぬ人間を導いてやることで忙しく、そんなことは頭からすぐに消えた。私はすでに、十三人目の処理に取り掛かろうとしていた。

# 調和のための必要

初出 『混凝土の隙間と奇譚集』 2008年12月30日 発表

2010年5月9日 公開

著者 伽藍堂

編集人 今出川潤

連絡先 [vert@bugyo.tk](mailto:vert@bugyo.tk)

企画・制作 [ver.T](http://ver.T)

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。  
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。  
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。